

# 館長就任の挨拶

## GREETING FROM THE LIBRARY MANAGER

### GREETING 1

図書館長  
名古屋図書館長  
のあいさつ

“いま以上に魅力ある  
大学図書館に”



図書館長・名古屋図書館長  
塩山正純

2018年10月から2年間、図書館長をつとめることになりました国際コミュニケーション学部の塩山正純と申します。どうぞ宜しくお願いします。

私の専門は中国語学で、特に近代西洋人の中国語学習・研究史について勉強しています。よく閲覧調査でヨーロッパの図書館も訪れますが、彼の地では、資料は使われてこそ生きる、という姿勢が徹底しています。実は、愛知大学の図書館も貴重な資料を豊富に所蔵しており、資料を必要とする人へのホスピタリティも遜色ありません。ただ残念なことに、貴重資料を閲覧する専用の場所がありません。そうした場所があれば、利用者に親切だけでなく、これまで蓄積して来た貴重な資料を「見える化」する一つの型にもなります。学内にある沢山の資料を世の中に公開・発信していくハブとしての役割も含め、図書館が出来ることを考えていきたいと思えます。同じく「見える」と言うことでは、名古屋図書館の蔵書五十数万冊が外部書庫に「仮」置きされて七年目、資料を見て調べられない不便な状況が続いていますので、図書館で実際に本を見て使える環境の回復に近づく努力を続けます。

二十数年前に私が学生だった頃、図書館は静かに利用するのが当然の場所でしたが、学びの

スタイルが多様化し、図書館の役割も多様化しています。それでも伝統のある大学では、図書館がキャンパスの中心にあって、大学らしさのシンボルになっていることに変わりはありません。もしキャンパスに図書館が無かったら、それはなんとも間の抜けた空間です。「腐っても鯛」は少々乱暴な言い方ですが、なぜ大学に図書館があるのか、大学の図書館の魅力とは何か、皆さんと一緒に考えながら、より魅力的な学びと研究の空間にする工夫をしていきたいと思えます。また、例えば、劇場がいくら立派な建物でも、お芝居とそれを演じる俳優、スタッフそして見物客が居なければ無味乾燥な箱に過ぎないのと同様に、図書館も、人が集まって図書館らしく使われてこそ活きた場所になります。皆さんにお願いですが、授業のある日、大学に来たら図書館に足を運んで一役買って下さい。そして、色々な意見を寄せて下さい。

それから、豊橋と名古屋の図書館は、二つ合わせて一つの愛大図書館です。名古屋校舎の都市型キャンパスの図書館と豊橋校舎の郊外型キャンパスの図書館の特性を今以上に活かした学びと研究の場にしていくために、各々の良さをお互いに発信して、両校舎の図書館を目的に応じて活発に使ってもらえるように、旗振り役をつとめたいと思えます。

### GREETING 2

豊橋図書館長  
のあいさつ



豊橋図書館長  
下野正俊

このたび、豊橋図書館長に再任されました、文学部の下野正俊です。ドイツ哲学を専攻しています。一期二年の務めと思っておりましたが、もう一度場所を与えていただきました。塩山新館長を始め図書館に関わる多くの方々との協力関係のもと、任を果たすことができれば幸いです。改めまして二年間、よろしくお願い申し上げます。

任を果たすとは、問題を正しく認識しその解決を図ることにほかなりません。私の見るところ、問題は豊橋固有の問題、愛知大学図書館全体の問題、そして大学図書館一般の問題という三つの層に分かれます。

固有の問題は、建物設備の老朽化への対応です。現在の建物が1966年に建ち、新しいはずの第二書庫でさえ1999年と既に築20年が経とうとしています。耐震対策はもちろん、古くなって用をなさない設備の更新にとどまらず、全体の建て直しは喫緊の課題です。

この豊橋図書館の施設問題は、愛知大学図書館全体の問題、そしてそれを超えて大学図書館全体の問題へとリンクします。名古屋図書館は外部書庫という弱点を当初からかかえています。その解決には、豊橋を含めた愛知大学図書館全体のグランド・デザインが必要です。グラン

ド・デザインを構想するには、大学図書館全体が直面する二つの状況、すなわち第一に急速に進行する資料のデジタル化、第二にこれまでのILLの次元にとどまらない複数大学の連携（コンソーシアム）による図書館のネットワーク運用という状況についての理解と見識が不可欠です。コンソーシアム化は海外、首都圏・関西圏では既に始まっている潮流であり、本学も遠からずその波に飲み込まれることは明らかです。こうした重層的に関係する課題を念頭に置いたグランド・デザイン（あえて言えば「理念」）を持たずに建て直しをすれば、必ず将来に禍根を残します。多くの方々の知恵と見識を集約して、来るべき豊橋図書館のあり方を見出すことこそが、私の任でありましょう。

偉大な図書館学者ランガナタンは、「図書館は成長する有機体である」と言いました。有機体、すなわち生物が環境の変化に適応して姿を変えながら成長し続けるさまは、時代の要請に応じて図書館が姿を変えながら成長し続ける様子と重なります。この変化と成長の有様こそが、上に記した「理念」に他なりません。学生、心ある教職員の皆さんとともに、図書館の「理念」を考え続けていきたいと思えます。